

● Culture

「もの」とは何か 深く考察

生 老病死の 旅路

● 菅木志雄 さん



野山に出かけていって動物を観察してばかりの少年でした。人と交わるよりも、田んぼのあぜ道を歩き、ドジョウ、ゲンゴロウ、タニシを見ている方が断然好きでした。なぜ彼らはその形で、そこに存在しているのかを考えていました。自然界に存在する物、つまり「もの」について深く考えるという芸術家・菅木志雄の根幹になっている精神構造が作られました。

脳外科医になった兄は、とても勉強ができましたが、私の成績は芳しくなかった。でも、両親は「勉強しろ」と言わず、兄とも比べることもなく、自由にさせてくれました。絵を描くことも好きでした。しかし、風景を描くと抽象画のようになってしまふ。小学校の先生はあまり褒めてくれなかったけれど、厚塗りのクレヨン感覚が心地よかったのを覚えています。高校でも美術部に入って絵を続けました。好きなことを少しでも長くやりたいと思いい、美大を目指しましたが、現役では受けられません。浪人中も野山の散策を続けていましたが、後半はJ・B・ハリスのラジオ英語講座を聞くなどして勉強に力を入れました。その結果、多摩美術大に入ることができました。

美術家になることを決意したきっかけは、同大で教鞭を執っていた現代美術家、斎藤義重さんとの出会い。海外の美術界で何が起きているか教えてくれるだけでなく、ガラス瓶など廃品や日用品を使った変な作品を提出しても、絶対にダメとは言わずに肯定してくれました。「もの」についてより深く考えるようになり、ライプニッツのモナド(单子)論、京都学派の西谷啓治著『宗教とは何か』を入り口に、インドの仏教哲学を勉強しました。従来の認識を取り去って、人間にとって「もの」とは何なのかを自分で最初から規定していけないと、作品として扱えないと思ったからです。

その意識は今もあって、ほとんど加工しない石や木などで「もの」と「もの」の間に生まれる関係や空間を感じさせる作品を作り続けています。人間も「もの」も同価値とすることを提示した作品は、世界を主客三元論で捉える欧州の人にはなかなか受け入れられません。1973年にパリ青年ビエンナーレに参加した時も「アートではない」と言われたり、作品を蹴り飛ばされたりしました。でも、無視ではなく、反応を引き出せたので手応えを感じました。事実、徐々に評価されるようになりました。

世界文学全集を中学生のうち読破してしまうほど、読書が好きでした。その延長でしようか、2000年以來、推理小説も書いてきました。執筆のきっかけは、たたき上げの刑事だった父です。亡くなる時、「これだけ資料があるから、小説書けよ」と、鑑識の方法など多くの本を譲ってくれました。私が少年時代から趣味で文章を書いていたのを知っていたのです。美術作品を作ることは、どのように言葉を「もの」に内包できるかという一端もあり、小説の執筆と通底していることもあると思っています。現代美術家は欧米を拠点にした方が成功する可能性が高い、と言います。しかし、日本人として日本で制作し、それが外国でどう受け止められるかを問うのが道筋だと思っています。

回り道かもしれませんが、芽が出る確率が下がるかもしれませんが、それでもいい、と耐えてきました。流されなかったのは、小さい頃から多くの時間をマイペースで過ごし、一人で考えるということに身をつけていたからでしょう。

ざっくりばらんな語り
状況律、捨置状況……。菅さんの作品名は難しい。ご本人も小難しい人ではないかと、内

びくびくしながら、静岡県伊東市のアトリエを訪ねた。杞憂だった。「こんな格好でごめんね。一番楽なんだよ」と言いながら、作業着姿で気さくに迎えてくれた。これまでに半生を語る機会はあまりなかったという。ざっくりばらんな語りについで引き込まれ、時間がたつのを忘れた。

すが・きしお 1944年、盛岡市生まれ。多摩美術大在学中の67年、シエル美術賞を受賞。「もの派」の中心的な作家として活躍。ベネチア・ビエンナーレ、サンパウロ・ビエンナーレに参加するなど海外での評価も高い。5月25日から6月30日まで東京・六本木の小山登美夫ギャラリーで個展を開く。

聞き手・森田睦

国	作家	執筆者	文献タイトル	媒体名	発行日	頁	発行元	展覧会名
J	菅木志雄		「もの」とは何か 深く考察	読売新聞	2018年1月27日 夕刊	p.5	読売新聞社	